田舎暮らし（えせ）

島田紳助

KTC中央出版

田舎暮らし（えせ）

島田紳助

江苏工业学院图书馆
藏书

KTC中央出版

島田紳助（しまだ・しんすけ）
本名・長谷川公彦。1956年3月24日、京都生まれ。
Ｂ＆Ｂに刺激されて、師匠の島田洋之介・今喜多代に入門。
1977年、松本竜助とコンビを組んで、京都・花月でデビュー。
夫人と3人の娘の5人家族。現在、「サンデープロジェクト」（テレビ朝日系）などのレギュラー番組7本をこなす超売れっ子タレント。
著書に「風よ、鈴鹿へ」（小学館刊）「メッセージ」「新　いつも心に紳助を」「いつも心に紳助をファイナル」（毎日新聞社刊）など。

えせ田舎暮らし

1997年9月５日　　初版発行
1997年9月29日　　第3刷発行
著　者　島田紳助
発行人　前田哲次
発行所　ＫＴＣ中央出版
〒460　名古屋市中区栄1－22－16
ＴＥＬ　052（203）0555
〒135　東京都江東区佐賀1－5－9
ＴＥＬ　0120－160377（注文専用フリーダイヤル）
振替　00850－6－33318
印刷所　図書印刷株式会社

乱丁・落丁は、ご面倒ですが、小社までお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-87758-053-0 C0095
© Shinsuke Shimada 1997 Printed in Japan

えせ田舎暮らし

島田紳助

はじめに　「えせ田舎暮らしへようこそ」

この本のタイトルをつける時、「えせ」という言葉の意味がわかりにくいから、「紳助流田舎暮らし」にしてはどうか、と出版社の人に言われた。

でもぼくは言った。

「えせ、という言葉はどうしてもつけてほしいんです。ぼくの田舎暮らしはニセ物やから。ニセ物が本物の顔をしてまかり通ってはいかんと思うんです」

見渡せば、ニセ物が本物の顔をしてまかり通っている世の中だ。だが自分はそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うはありたくない。ぼくの心の中のシャイな部分で、「ニセ物」だと言っておきたいのだ。

だが「にせ田舎暮らし」では、読者に失礼だろう。確かにぼくが今住んでいる能勢というところは田舎だし、普通には「田舎暮らし」と言っても嘘ではないからだ。ただ、莫大な金をつぎ込んでそこに家を建て、快適に暮らしているということに対しての、ぼくの「本物じゃない部分」を白状しておきたい。

そのために「えせ」という、あいまいな言葉をどうしてもつけておきたかったのである。

もし、この本を読んで、田舎に住もうと思った人がいたら、ぜひ若いうちに実行してほしいと思う。年とってからでは、ちょっと無理だ。

年をとったら、病院が近くにないと不安だし、買い物できるところが近くにあってほしいと思うだろう。それは、街の生活に慣れてからでは、よけいたいへん

だ。若い時は体力があるから苦にならない。

まず、ぼくらがやったように、十年間くらい土地を探す。休みの日に、自分の住みたいところを探し回るのだ。新聞を見て新興住宅地の見学会に行くのもいいかもしれないが、もっと自分で地図を見て、こんなとこどうやろうという感覚で行ってみることをおすすめする。お弁当をもって、家族で見て回っていたら、すごく気に入るところがあるかもしれない。

で、ここに住んでみようか、と。

本来、人間って、そういうものだと思う。不動産会社の条件に合わせて住むことが多いけど、自分でイメージをもって探す。夢を描いて、探す。

よく「家は三度建ててやっと納得がいく」なんて言うけど、現実には、何回も建て直したりできるもんじゃない。三十過ぎて家を買うのにローンを三十年組んだら、買い替えなんて、普通ない。売らないのなら、どこに住んでも同じだし、資産価値なんて、考える必要もないと思う。

田舎に住んだら、季節がわかる。天気が生活にかかわってくる。街にいて雨が降るかどうかなんて、傘がいるかいらないかのことでしかない。

でも、田舎にいたら、雨の日はほんとうにできることが少ない。その代わり晴れたら、じっとしていてはもったいないとムズムズしてくる。

それは、目に見える空が、あまりにも広いから。

街に住むのと田舎に住むのは、サラリーマンするのと自営業するのに似ているかもしれない。ぼくは理解してないのかもしれないけど、サラリーマンの暮らしというのは、小さな苦しみと小さな喜びという、小さな波だと思う。それは街の暮らしのように、便利だけれど、ものすごくしんどくもない、でもすごい感動もないものなのではないか。気持ちの針の揺れが少ない。田舎に住むのは、苦しいこと、体を使うことも多いけど、その分、感動も大きい。

それでも、田舎に住んでいた人が都会に憧れて出てくるのは、それが当たり前

になってしまった生活だからだと思う。うちの近所の農家の人は、外でバーベキューしたりはしないのだから。

今、街にいる者が感じる田舎の感覚、アウトドアがはやるような感覚を持ち込めば、生活することだってもっとおもしろいはずだ。

大切なのは、どうやって感動してやろうかという気持ち。

それを求める人なら誰にでも、ぼくは自信をもって、田舎暮らしをおすすめする。

「えせ田舎暮らし」もくじ

はじめに　「えせ田舎暮らしへようこそ」……2
序章　なぜ、ぼくは田舎を求めたのか……11

えせ田舎暮らし

夢の入り口……28
山ごと買うてもた……37
田舎はぼくに教えてくれる……50
暖炉を見つめていた日……60

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぼくのヒヨコがやってきた！……71
さよならグーフィー……88
春はブレザーに乗って……96
オオクワガタ伝説……103
友だちと、田舎遊び……113
野菜づくりの極意……126
スズメバチの来襲……138
松茸山は迷彩服で……149

事件・鹿の交通事故……157
やっぱり、田舎は楽しい……167
父の田舎暮らし　長谷川ゆか……175
おしまいに
「それでもぼくは言う、えせ田舎暮らしへようこそ」……202

●装丁　加藤茂樹（K2）
●構成　森　綾

序章　なぜ、ぼくは田舎を求めたのか

ぼくの遺伝子は田舎を知っていた。そして、田舎を求めていた。

四十歳になる前に、ぼくは家族を説得し、役所に頭を下げ、税理士さんに大見栄切って、大阪府能勢町という田舎に七千二百坪の土地、ほとんどムダとも思える山だらけの土地を買って、家を建てた。

でも、ぼくは、街の子どもとして生まれた。だからこの本で、島田紳助として田舎に家を建て、そこでの生活を語るのには、少し説明が必要だと思う。

京都の実家は南区の西大路というあたりだ。国鉄（ＪＲ）の駅から歩いて八分ぐらいのところにある。

この間、実家に帰って歩いてみたら、空き地だったところ、駅から家への道の両脇は、今は市営住宅が建ち並んでいた。左側がセリをつくっている田んぼ、右側が原っぱ。そこでぼくらはバッタをとり、セリ田ではトンボをとった。

「ジュウダイ行こ」

ガキだったぼくらは、その場所をジュウダイ、と呼んでいた。今思うに「ジュウ」は「住」なのだろうが、「ダイ」の漢字はわからない。でも、ぼくらには「ジュウダイ」という愛称みたいなもので十分で、意味なんかなくてもよかった。

それよりも、そこに高く高く飛ぶギンヤンマを捕まえることが、大事なことだったのだ。

家のすぐ近くには、七台くらい入れるガレージがあって、そこも遊び場だった。

そこに入るためには、まず必死によじのぼらなければならない金網があった。しかし、三十数年たって見ると、今のぼくの腰の高さしかない。

「ここをよじのぼってたんか」

思わずひとり言が口をついた。もっと驚いたのは、それが少しも腐っていないということだった。

そこを越えると、あの下着メーカーのワコールがあった。

砂利を敷いた上に建物があって、中ではおばちゃんたちがブラジャーやパンツ

を縫っていた。いつもバンが止まっていて、夏に通りかかると、窓を開けて作業していたのを覚えている。

それがだんだん、だんだん、すごい勢いで大きな会社になっていった。三十五年たったら、世界のワコールと呼ばれていた。なんだか、昔は友だちだったのに、すごいスターになって「おまえなんか知らん」と言われているような気がしてしまう。

ワコールの裏には、またとっておきの遊び場があった。

ザリガニのとれる田んぼがあったのだ。まず竹屋さんで、竹の筒の切り残ったのを拾ってくる。それを田んぼの溝にいっぱい沈めておき、次の日の放課後、自転車をすっ飛ばしてとりにいく。おっと、網がいる。網で節の切った方を押さえ、さっと水から上げるのだ。

いたいた！　中に、泥にまみれたザリガニが入っている！

そうやって、京都という町でも自然を見つけて、ぼくは遊んできた。でも、そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com